

芥川だより

編集発行人 下村嘉明

発行所 着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2-14-3

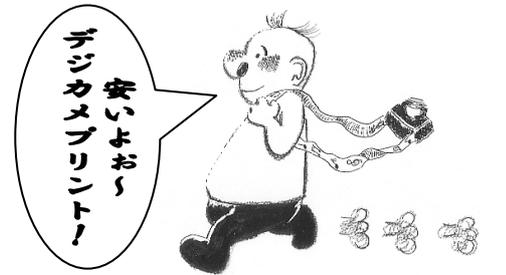
TEL 072-681-8870

発行日/2007年2月20日

ご希望の方にはお送りします

お気軽にお問い合わせ下さい。

e-mail: akutagawa_dayori@yahoo.co.jp



芥川の写真屋さん

牛のいる風景



玄関に入った土間の左手に6畳ほどの牛小屋があり、一頭の雌を飼っていた。わらを敷きつめた薄暗い部屋で、一年の大半を過ごす。大変なのは毎日喰わせる餌の確保だ。牛は新鮮な草を好む。朝早くから草刈りに追われ、大きな籠いっぱいになった草を背負ったものだ。近くに草がなくなると、山に採りに行く。棚田から山まで雑草はきれいに刈り取られ、美しい里山が広がっていた。草のない冬場は、押し切りで稻わらを5センチほどに切り、豆かすと米ぬかを混ぜて食べさせる。◆牛には二つの役割がある。田の土をおこす仕事と仔を産むことである。仔牛は二年たらずで、雄は肉牛として、雌は飼い牛として売られていく。貴重な換金動物でもあった。牛は仔を産むことを求められるので、老いた牛や弱い牛はブローカーである博労によって売られていく。家族同様にだいに世話をした仔牛が売られていくときは、

体をきれいに拭いて送り出す。仔牛は連れていかれるのを嫌がり、母牛は悲しげにないていた。◆畔にタンポポが咲き、レンゲの花が田をうめつくす春——、冬の間、暗い牛小屋で陽の光を浴びることがなかったわが家の牛が活躍する季節である。外に連れだした牛に犁(すき)を取り付けて、田の土を掘りおこす。もの憂げな表情で動きの鈍い牛を「しっしっ」といいながら、手綱で尻を打って追いたてる。そんな風景は、40年前の農村では当たり前のように見られた。それは遠い昔に消えた農村の営みのような気がするが、つい先頃のここのようにも思える。(嘉)

芥川商店街歳時記

リニューアル一周年記念セール・3月16日～18日

無料粗品プレゼントは16日・17日

- 天神まつり 2月25・26日。『25日午後1時から4時まで芥川商店街でミニ出店』
- 保険見直し相談会(無料) 毎週土曜日・日曜日 保険の身近な相談所・総合保険事務所

☆☆☆ 投稿記事 随時大募集!! ☆☆☆

深奥幽玄 手談の交わり 囲碁で豊かな人生を!

日本棋院高槻支部

芥川囲碁サロン (株)入谷商会経営

日本棋院 棋士 谷村義行八段による

大盤解説 毎月第二日曜日 午後2:30より

指導碁 毎月第二日曜日 午後4:00より

高槻市芥川町2-10-11 (芥川商店街)

TEL・FAX 072-682-0403(代)

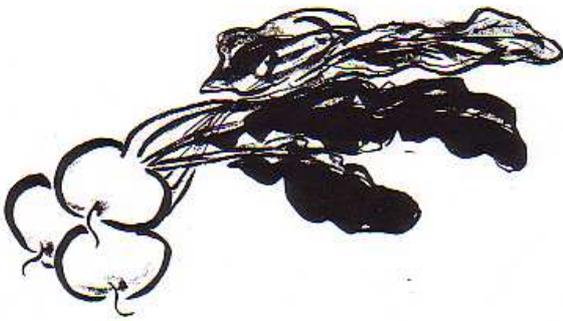
ただ、おばさんとか、おばあちゃんとか言われるごとに、ガクツときてしまう。やはり言葉には、そのイメージがある。実際の年齢や体型は、この際棚に上げて聞かないでほしい。いつも若々しい気持ちでさっそうと生きたいと願い、そう努力しているつもり。しかも、孫たちと話す時、おばあちゃんわねと自分で言わなければならぬ無念さ。何かよい言葉はないものか。

井上ひさしさんは、そのエッセイの中で、男には二百三十あまり、なんと女にはその三倍以上あるとか、ことばが。何か新しい言葉がいつか出来るのだろうか。思えば八十年代の幕開けと共に、いろんな問題がどつと前面に押し出されて来た。産業公害問題、親子の殺し、ガンと頭をなぐられた様な気になつてしまふ。

私自身も今年こそ、何はともあれ、二十年くらい前に戻してと気持ちはあつたのだが、それが口でいう程やさしいものではない。一体どうしたらよいかと戸惑つてしまう。食べ物はどうと、五十年前と同じである。昔と変わらず、何でも自分で作れるものは作ることにしている。昔と違うのは、この方が費用がかかり、却つて手作りは贅沢と言われそうであ

る。そう遠くない将来、我が家の手作り食品なんてごく一部のみで、好むと好まざるとに拘わらず、すべて外食産業によつて大量生産の既製品になつていく。そんな世の中になる前に私はと思つたが。こう言つてしまつては、自分が生きていく時代さえよければ、あとは野となれ、山となれ。いかにも無責任すぎると思うけれど、どうすることも出来ない。

今生きている中高年の人達が、未来の人々のために少しでも良い世の中を残すよう心がけねば、生きていく価値がないように思うが。そんな人が一人でも多く増えてくれればと祈るような気持ちをもっている。



生きています

触れてみる七夕様の吹き流し
蒸し暑い気分をいやしてくれるかの
ように、あちこちの商店街にひらめ
いている七夕さん。

何んと書いてあるのかなと手にとつて見る。さんすうがよく出来ますように。サッカーが好きです、選手になれますように。いろんな願いが書かれているのは、自分達のときと同じである。

或るデパートに行った。見るからに立派な七夕さん。短冊三枚〇〇円とか値札がついている。よーし一丁かけてみるか、大枚を掛けて書いた。何んと書いたかおわかりかな？

買った宝くじ 夢でもいいから
一億札手にしてみたい夢
住所・氏名をはつきり書いておいた。やつぱりはかない夢だった。いまだに何回買つても当選なし。こんな願い事、空想も結構楽しいものである。

洗面所で自分の顔をしみじみ照らしてみる。その楽しさ、情けなさとかが交錯する。年頃の娘になつていく私に、モンペはけ、口紅つけるな、パーマかけるな。全く非国民のよう
に言つて、父は目をむく。なんで？
やつとわかる時が来た。

家には、弟が高等科くらいで、戦闘帽を頭にのせ通学していた時分、お国のために奉仕するという年齢ではなかった。そのぶん、よく奉仕隊に加わつて頑張つてきたつもりだが、父は大分村の人達には氣を使つていたらしい。

♪赤いリングにくちびるよせて
弟は唄が好きで、公会堂でみんなの前で、上手にこなして留守家庭を慰問していた。

♪花嫁御りようはく何故 泣くの
素人的にゆかたを着て、姉弟が演技をやるのを見て、祖父はにがり切つていた。戦争まつ最中という非常に時に、わが子はのんびり唄つて踊つて。

バカ者 といった表情
その年の八月に終戦。これでスカートもはける、口紅もつけられる、パーマもかけよう。敗れたという暗さよりも、これからは、何をしようかと遠慮することない。

♪負けて口惜しいく花いちもんめ
勝つてーととは言わない
いま、



ドスカ天

梵店主

あらすじ

大学に入学したよっちゃんは、山岳部に入り、初めての合宿に参加した。冬の剣岳・早月尾根の最初の夜に「どうしたらバテないか」寝ずに考えたことを実行しようとし出発した。

よっちゃんにとつて天気などは問題じゃない。バテないように、昨夜寝ずに考えた通りしなければいけない。トップにピタリと付いた。少し登ると、うっすらと周りが見えるようになってきた。汗も出てきた。重くなったザックがずっしり肩に食い込む。食料と石油は減っているから軽くなっているはずなのに、テントが重くなっているのだ。必死にトップに付いて登る。ときどきトップのザックに私の頭があたるが、前を行く二回生は何もいわない。彼も必死にラッセルをしているから、気にかける余裕などないのかもしれない。とにかく前にピタッと付いていれば怒られることはない。急な登りでのラッセルは雪が腰ぐらいの深さになるからたまらない。彼はよっちゃんの次に重い荷を担いでいる。そのうえラッセルである。しかも、交代なしのただ一人の二回生だ。

今日は伝蔵小屋手前でテントを張る

はずである。そこまでなんとしてもバテずに行かなければ……。頭の中はバテるんじゃないかという恐れでいっぱい、景色も天気も気にとめる余裕などない。トップを行く二回生も悪戦苦闘している。今日はなんとかバテずに行けそう。昼前にリーダーがテントをここで張るといったとき、ホッとした。バテずにすんだのだ。そう思うと、何かすごく楽しくうれしくなった。少しばかり心に余裕が生まれたのである。

吹雪はだいぶ弱まっている。テントを張るのもずいぶん慣れた。昼過ぎに上級生三人が上部ルートの偵察に出かけたので、よっちゃんのはんびりとテントで昼寝した。昨日とはえらい違いである。ベースキャンプをここにするわけだから、もう重いキスリングを担がなくてすむ。なんともいえない開放感である。エッセンづくりやテントの除雪ぐらいはたかが知れている。

偵察隊が帰って来るとトランシーバーで連絡があったので、雪を溶かしレモンティーをつくって待つ。まもなく帰ってきた偵察隊の報告を聞きながら、みんなでティーを飲む。リーダーが「明日は剣岳本峰をやる」といって、先発隊二名、本隊二名を指名した。よっちゃんと元リーダーの四回生のふたりはテントで待機である。

天候は回復し、天気図からも明日は一日晴れあがりそうな気配である。昨夜とはまったく違う快適な夜となった。今夜は除雪の必要もないだろう。

次の日の朝はやはり三時半起きの四時エッセン。夜中の降雪でトレースが消えかかっている。待機組の四回生とよっちゃんは伝蔵小屋の上までラッセルすることになった。非常装備などを入れたアタックザックを担ぎ、足にはワカンとアイゼンをつける。膝上の新雪はサラサラして気持ちが良い。

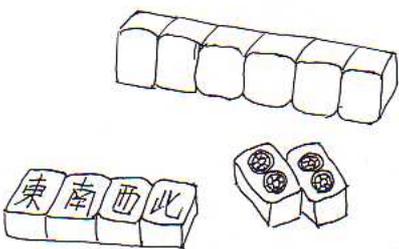
やせた尾根筋に來ると四回生が終始トップを歩いた。よっちゃんについてはいっただけなので体力的には楽である。小屋を過ぎてしばらく登ったところで急に尾根が細くなり、ナイフリッジになる。そこで先発隊と本隊に激励を送り、よっちゃんと四回生は下りはじめた。

伝蔵小屋の手前まで来ると、その四回生は「下村、ちよっと小屋のおじさんに挨拶していこう」といいながら、小屋に向かっていく。佐伯伝蔵さんが建てたから伝蔵小屋という。四回生は、京都からもってきたお茶菓子「おたべ」を取り出して伝蔵さんに渡し、親しく話しはじめた。

タバコを吸いながら山の様子などを聞いていると、佐伯さんが「マージャンじゃないか」という。四回生は「いいですよ」と伝蔵さんの誘いにのって靴

を脱ぎはじめた。よっちゃんはパイを並べるぐらいしかできないが、人が足りないからやれという。小屋の手伝いの人とあわせて四人揃い、マージャンを始めた。「こんなことをしているのか」と自問しながら四回生の顔を見ると、平然とパイを打っている。今ごろ、先発隊や本隊は必死で登っているはずである。後ろめたさを感じながらマージャンに興じていたが、半チャンしたところで、さすがの四回生も先発隊との交信があるからといって、ゲームは終わりとなった。結果はよっちゃんたちの勝ちだった。

小屋を出しなに伝蔵さんが缶ビールを二個くれた。先輩は缶ビールをもらうと、「いただきます」といいながら飲んでしまった。「お前も飲め」というからよっちゃんも一気に飲んだ。冬山の昼下がりのビールはうまい。小屋の外に出ればドスカ天の快晴で雲ひとつなかった。



秘かな部分

——母よこの草の戸を閉じよ

詩人新川和江の「草の戸」というエッセイの冒頭である。この一行で始まる詩を、新川は病床にある母を付き添っている間じゅう書きあげようとしたが、後につづく詩句を紡ぎだすことはなかった。

「日に数度、広口の尿器にかなしいほど僅かな水を受けとめながら、私は母が、一刻も早くこの苦しみ、この屈辱から解放されることを乞い希った。若い女のそれのように、しぶきをあげて進むこともなく、僅かな水は閉じた脛からこぼれる涙のように、萎えた草の根をつたってビーンに落ちるのであった。この草の戸を閉じよ、母よ。戸の奥処（おくが）には、ほそぼそと、あるいはけんらんと、母の辿ってきた道が続いており、娘である私のこの躰も、この心も、まぎれもなくそこをふるさととして、この世に送り出されたものであったとしても……。その戸口は人に秘して置くのが、母の、そうしてそのまた母の美学であり、娘の私が受け継いだ美学である筈だった」

寝返りも打てないほどに衰弱した母は回復の見通しがまったくた

ず、点滴による水分と栄養の補給だけがかるうじて命をつないでいた。そのころに「この草の戸を閉じよ」という、祈りのような詩句を絞りだす。「その祈りは、母に再び元気になって欲しいと祈る気持と揉み合い血みどろになつて」新川を嘔（さいな）んだ。

草の戸は人に秘しておくという美学を貫くのはむずかしい。身体機能が衰え、歩けなくなり、人の手を借りなければ用を済ませることができない人にとって、この美学を貫きとおすことはできない。そんな状態に陥った母に、新川は「草の戸を閉じよ」と心の中で叫ぶのである。それはすなわち、死を意味する。祖母から母、母から娘に受け継がれた美学を生きようとするがゆえの苦悩がにじむ。

俺は毎日、お袋の秘かな部分、草の戸と向き合っている。衰弱しながらも意識の通じあえる新川の母とちがって、植物状態のお袋はあつけらかんとしている。含羞を類に浮かべながら尿意を訴えることもなければ、排尿を告げる言葉もない。認識があっても、それを表現したり反応することができないだけかもしれない。植物状態でなかったならば、あつけらかんではすまされない。お袋にとっても僕にとっても、排泄の処理は精神的な苦痛をとまなつたにちがいない。

三、四時間おきに排尿の確認をする。オムツを交換し、お袋の秘かな部分を清潔に保つようになっている。数時間おきに排尿し、毎日排便をする。規則正しくそういう状態を保っているのが安心である。半日排尿がなかったり、三日も四日も排便がないと、心配になってくる。排泄は健康の重要なバロメータだ。いまは排泄処理も日常生活の一部として普通にこなしているが、当初は簡単なことではなかった。

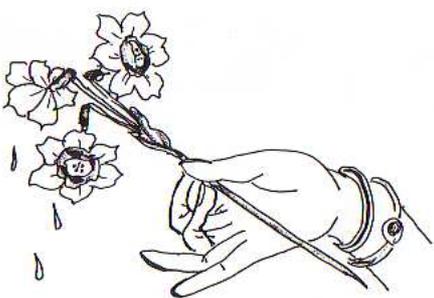
姉に代わって介護をはじめたとき、どうしても排泄の処理だけではできなかった。息子の僕にとって、お袋の草の戸はやはり見てはいけないもの、触れてはいけないものだった。お袋としても、意識があったならば、ぜったい見せなかつたであろうし、触れさせなかつただろう。このことが、介護をはじめめるにあたって眼前に立ちはだかる高い壁であった。しかし、乗りこえなければならぬときが必ずくる。

ある日、朝食後一時間経って、お通じがあった。一人で処理しなければならぬ。もはや躊躇（ちゆうじゆ）してはられない。文字どおり決心の臍（はらこ）を固めて、とりかかった。オムツは三重にしてあってフラットシート、その外側を大きなオムツでつつむ。尿取りパットごと便を取り、秘かな部分を含めておしり

全体を石けんで洗い、湯でながす。お湯を入れる容器は台所用洗剤の空きケースを使う。汚れた湯はフラットシートが吸い取ってくれる。後はティッシュでおしりを拭き、新しいオムツに代える。お袋は目を開けたまま、わかっているのか、わかっているのか、無表情である。心の中では含羞を込めて「やめて！」と叫んでいるかもしれない。最初は意を決したこの作業も、いったん乗りこえてしまえばすぐに慣れる。

昨年暮れには肺炎になって気をもんだ。腰痛は年を越えてもまだ治らない。少しずつではあるが、やはり衰えてきてはいる。歳を重ねるごとに衰弱していくのは自然なことである。しかし、健康状態はけつして悪くないのだ。

——母よ、草の戸を閉じる刻（とき）は、まだ先だ。



私の健康法

江戸っ子エンちゃん

エンちゃんは、気持は澁刺とした少女、本当は八十四歳のおばあさんです。

七十五の時、廊下をまっすぐに歩けなくなり、妹に電話をすると、「明日は必ずお医者さんに行きなさいよ。今夜はもうすぐに横になりなさいよ」と注意される。妹の忠告に従ってその晩は早く床につきました。次の日、脳外科へ行って診察を受けると、先生は「よく来られましたね。すぐに入院した方がいいです。倒れても不思議でない状態です」と言う。さっそく入院し、治療が始まりました。絶対安静の状態で、栄養補給は朝昼晩に点滴によります。そんな入院生活は三週間におよびましたが、治療の甲斐あって元気に帰宅できました。

しかし、絶対安静でベッドで寝たきりだったために、手足の筋肉がなえて歩けなくなっていました。起き上がろうとしても、腰が痛い。何かしようとしても、思うようにできない。「どうしようか」と考え、まず顔のしわ取りから始めました。

顔はボタン刷毛、身体は健康タワシで、毎日マッサージを続けました。額の正面には怪我の傷跡が深く残っていたので額にはさわらず、目じり、目の

周り、鼻の下、あご等を毎日、ボタン刷毛で刺激を与えたのです。すると、一カ月ほどで顔のしわが目立たなくなりました。腕や足は、健康タワシで毎日マッサージを続けると、腕や太もものぶよぶよしたたるみがなくなりました。

ところが、歩けないのです。四本足で歩くほうが早いので、手をついてよたよたと室の出入りをしていたのですが、不自由で仕方ありません。それで歩く稽古から始めました。歩けるようになるためには自分自身で努力しなければと自覚して、少しずついいから、何でも自分でするようにしました。やさしいお嫁さんや孫達の援助も断り、危なっかしくても手助けしてもらわない、と自立宣言しました。最初は足踏みから始め、屈伸、腹筋の練習を二、三回からして身体をならしめます。それからフラフラする身体を、タンスの引き出しを利用してささえる。都合のいい高さの引き出しにつかまりながら、歩く練習をしました。毎日するごとにより、少しずつ一人で歩けるようになったのです。

退院後、脳外科の先生からいただいた薬を飲んでいましたが、どうも頭が重くなって下がり、背中と腰が曲がるような気がしてきたのです。何とかならないかと佛様をお願いしております

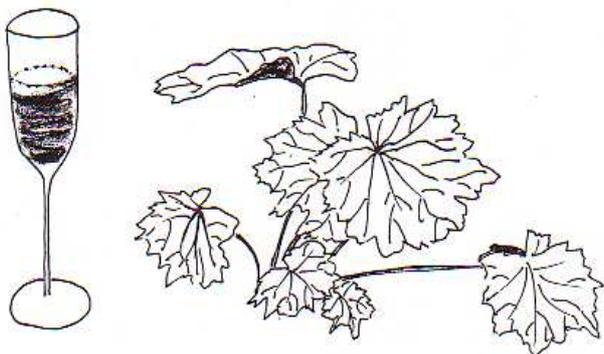
と、突然、亡き姑が「早く雪ノ下の葉っぱを採ってきて、その汁をすすつたら、心臓が良くなって脳も活性化するんじゃない」と教えてくれる声が出たのです。漢方薬の本で調べますと、雪ノ下を乾燥させて煎じて飲むと心臓にいいと書いてありました。子供が小さいときにひきつけを起こしたことがあるのですが、そのとき姑はすぐさま雪ノ下の葉を採ってきて挿り鉢でつぶし、ガーゼで絞った汁を子供の口へ数滴落としたのです。それだけで、子供がすぐに気がついたことを思い出しました。

今の私は心臓が悪いのだから、姑の教えのとおり雪ノ下の葉が効くにちがいない、ミキサーにかけてジュースにして飲んだらどうだろうか、と思いつたのです。その日から、庭にあった雪ノ下の葉っぱを三十枚、洗って蜂蜜を少し入れてジュースにし、飲み続けました。すると、三カ月位経ったある日、これまで休み休みしか登れなかった坂が、休まずに登れるようになったのです、嬉しくて先生に尋ねると、「大変良くなっています。心臓の周りを良くマッサージしてね」と言われました。

今では朝食の代わりに雪ノ下ジュースを飲んでいきます。蜂蜜はやめて冷凍バナナを五十CCの水に入れて、そこに雪ノ下の葉っぱを入れて、ミキサー

にかけてます。大きく育つ夏場は三、四十枚、小さくなる冬場は百枚ほどでコップ一杯のジュースがつくれます。おかげで血液の循環も良くなって、脳血栓もなく、手足の痛みは消えました。背中や腰が曲がることもなく、顔色はとて良くなりました。健康が取り戻せたことは何より嬉しく、今は雪ノ下さま様です。

雪ノ下は土と空気を選びます。土の悪い日当たりも悪いところでは、いくら肥料をやっても育ちません。ちなみに便秘の時は、アロエを三センチほどに刻んでジュースに入れて飲むと良く効きます。



銀行取り付け騒ぎ

幼い頃に足を怪我した私を、何かといたわってくれたのは父であった。朝はいつもゆつくりと起きる父が、日曜日には早く起きる。

今朝も早いんだろうなあと思っていると、「NHKの朝のラジオ体操に参加しよう」と五時頃から起こされる。NHKの放送局が出来たのは関東大震災の二年後である。港区の山手、徳川家の菩提寺、増上寺の山隣にそびえる都内最高峰、といっても標高二六メートルの愛宕山にその放送局が建っている。愛宕山に登るには正面に男坂という石段、その横手になららかな女坂がある。父はいつも男坂の方にゆく。一六五段の石段を登るのがなかなか大変であった。石段が一直線に山頂につづいていて、登りきった所にNHKの放送局があった。

この愛宕山から、毎朝六時半にラジオ体操の実況が放送される。日曜日になると、父は私を連れ、身心の鍛錬の為とあってその階段を登り、頂上の広場で行われる体操に参加する。壇上にあがった体操の先生と一緒にあの軽快なリズムに乗って体操をして、最後に深呼吸、あのととき味わった清新な気分

は忘れられない。

身体は普通サイズ、足の怪我のために歩くのが少し不自由で気が弱く、ちよつとした事にも涙ぐむ、そんな泣き虫のエンちゃんだった私を、父は厳しくも温かい眼差しで見守ってくれた。私がたくましくなったのは父のおかげだと思う。父は講談が好きで、愛宕山の石段を馬に乗って登った曲垣平九郎（まがきへいくろう）の話をよくしてくれた。

その放送局が何年か経って、私の家のすぐ近く、虎ノ門に移転して来た。それが刺激となって、私をアナウンサー希望にかりたてた一時期があった。そんなことが懐かしく思い出される。

鍛錬のために私はときどきランニングをした。私の家から二・五キロほど先の宮城を往復した。コースは、日比谷公園をぬけ、外濠となる外苑を走って二重橋に出る。帰りは楠木正成さんの銅像に挨拶をして、内幸（うちさいわい）町をぬければ赤レンガ通りに出る。市電の通りから三軒目が私の家である。新橋駅へ通ずるこの市電の通りには、安田銀行、第百銀行、三菱銀行と、銀行が並んでいた。

ある日、外がざわざわ騒がしい。通りを出ると、銀行の壁をよじ登るようにしてコンクリートの壁にへばりついている人達の姿が見えた。泣いたりわ

めいたり、その異様な光景に子供心にも恐ろしさに身震いがした。家に引き返して父に「大変よ、なんだか人が銀行の窓や壁にぶら下がって、わめいているわよ。一体あれは何なの」と半べそをかきながら言った自分を思い出す。父は「気の毒になあー。あれは銀行の取り付け騒ぎといってなあ。銀行が潰れたんだ。そばへ行ったら怪我するかもしれないから遠くの方にいなさいよ」と注意してくれた。「銀行が潰れたって、お家は建っているじゃない」と不審に思ったものである。あれから何十年経っただろう。景気を持ち直して、良くなったり悪くなったり、戦争という大激変を通りぬけて成長してきた日本。

最近窓や扉に取りすがりついて大声あげて泣いているぶざまな姿は見られない。かわりに銀行の通帳と改名された銀行名を頼りにあちこちたずねつつ改名された銀行で新しい通帳を貰って満足しながら家路をたどって納得という処である。これは時代の教訓である。一生懸命、命がけで働いて気がついた時は、銀行に預けておいたものが銀行其の他の不振の道連れになって元も子もなくなってしまう事は泣くにも泣ききれない。あの時は、運が悪かったとの転落で承知出来るものではない筈だが、どうにも取り返しがつ

かないようだ。

だが、この頃は事前に保障する金額の限度額を定めて注意を示唆してくれている。殆どの銀行が一千万円以上の保障はしないと云っている。沢山ある人はタンス預金にして、いくら探しても出てこない、頭をかかえている人がいると聞く。本当に入れておいたの？と疑いたくなるけど、隠し財産だから訴えられないとの事、泣き寝入りでも仕方がない。「まあ内緒で隠しておく程、持っていたらいいわねー」となる。

銀行の取り付け騒ぎのあった頃は、まだ新橋に橋があつて江戸城の濠へ行く方は道が塞がれていたが、まだ東京湾の方へゆく川に船着場があり、ボート又は手漕ぎ船が泊まっていた。夏は舟に乗せてもらって夕涼み等したものである。隣のゆきちゃん、舟を漕ぐのが上手でよく誘ってくれたものである。大体五百メートルぐらい行つて帰つたけれど、一度お台場へ行つて見ようかと大森海岸迄出て行つたことがある。その時はスリルがありすぎて怖かった。落ちたらどうしよう、と思つて船べりをしっかりとって、ひやひやしながらお台場一周して帰ってきた事は誰にも言えない幼い頃の冒険であった。父に知れたら大目玉であつたであらう。

◇魚あれこれ◇

スズキ (鱸) ②

周防 春日丸

出世魚という呼び方には、「成長に伴って出世するように名前が変わる魚」として、江戸時代までは、武士や学者などが元服の際や出世に伴い、名前を変える習慣になぞられたものである。

出世魚とは何を基準に名前を変えるのかというと、魚の大きさ(長さ)によって異なる場合が多く、体色が変わりそれに伴い呼び名が変わる魚もいるが、大きさによって名前が変わる魚が多いようである。

スズギも幼魚から成魚までの間には何回か名前を変える出世魚である。地方によっては大きさと呼び名が一致しないこともあるようである。

関東では最も小さいものをコツパ、体調十五センチ以下のものをハクラ、全長二十四センチ位の一年魚をセイゴ、全長三十センチ以上の二年魚をフツコ(関西ではハネ)、全長六十センチ以上の三年魚をスズキと呼び、これよりさらに大きくなったものは大太郎と呼んでいる。このような呼び名はすでに江戸時代でもみられる。参考までに：三(四寸位)(約三十二センチ)なもの、を世比古(せひこ)、六(七寸)(約十八、二十一センチ)から一尺(約三十センチ)も

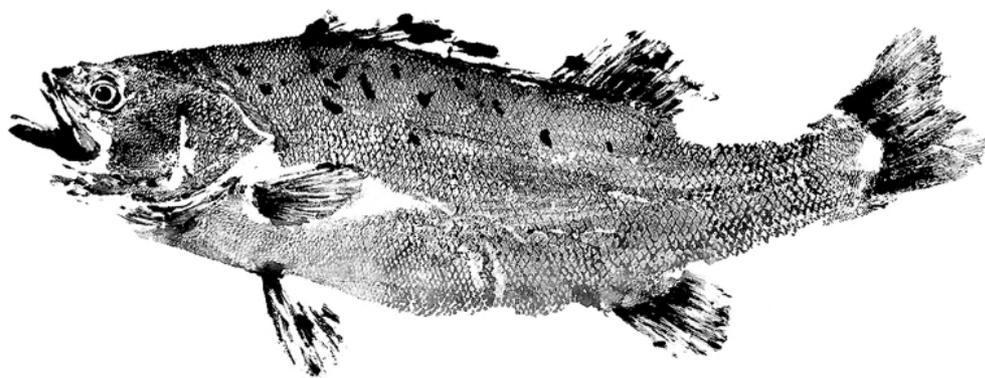
のを波禰(はね)といい、一尺以上二(三尺)(約六十、九十センチ)を須受岐(すずき)という。セイゴやフツコの名前は「齡」の呼び名が決め手となっているといつて、その年に生まれた魚は当歳児(とうさいご)といい、セイゴはこれが変形したもの、フツコは二歳児(ふたご)が変形したものとしている。

この他に、土佐ではセイゴのゴ(五)にかけて、セエロク、セエシチ、セエハチとこの大きさを序列化している。また浜名湖では、マダカア(フツコを越えてスズギにあと一步の魚をいう)といつて、「まだスズギになれないのかあ」という意味で呼んでいるようである。

関西では関東のフツコをハネというが、スズギが水面を跳ねるためとする説と、セイゴも終わりの終わり(はねる)の意で呼ぶとする説があったり、ユニークな呼び名としては、東京では体長二十センチほどの幼魚をデキといい(デキは男の子に対する罵言)、山陰地方では若魚をチュウハン(中半)またはアンサン(兄様)と呼んだり、北陸では老魚をニュードウ(入道の意で坊主頭の化け物をたとえて)、長崎ではヌリ(化け物のこと)、北九州ではハクウ(白魚の意とか)と幼魚を呼ぶ。

スズギの年齢査定は鱗上に出来る年輪で行われ、この年輪は十二月から翌年一月に形成されることが知られてい

る。これをもとにすると、一歳で二十センチ前後、二歳で三十センチ前後、三歳で四十センチ前後となり、これらの成長はもちろんな地域によって異なるわけである。



サークル山歩 『タカツキ』

同行者を募っております。ご一緒に歩きませんか。地元高槻、及び近郊の低山を毎月1回歩いております。

1999年秋から87回実施しました。

<詳しくは下記どうぞ>

会長 西野宏 072-674-5054
相談役 奥谷晶男 090-9045-1669

じゅっぽうえん

お茶の 十方園

高槻市芥川町1丁目13番12号

TEL 072-682-0310

高槻特産

北摂名物

摂津峡漬

発売元

投稿「川柳」

真本 嘉代子

- ろう梅を一枝添えて墓参り
- 脳トレで加齢現象進まぬ様
- 看護師に身を任せたる穏やかに
- 夢でいい歩いて帰ろう置き手紙
- 嬉しい日少し美化して書く手紙

読者からのたより

◇ 芥川だより待ち遠しい時があります。ひといきに読んで、味わってなるほどなあ、とうなずいています。楽しみです

大蔵司 Iさん

◇ 昨日の夕方風が冷たくて雪がくるのかと心配していましたが、雪ではなく霜が降りて、大変寒い朝になりました。芥川だよりが昨日届きました。何もかも私の知らない便りで、いろいろ教えて頂きました

京丹波 Aさん

民踊まつりを観て

梵店主

二月四日、第十六回高槻市民・民踊まつりが、交通事故被災者救援チャリティーを兼ねて高槻現代劇場大ホールで開催されました。主催は日本民踊研究会・豊史会と都市交通を考える会であります。

私が急いで会場に入った時は、薄黄緑の扇子を手に、着物は白地に茶の波模様、枝垂れにむすんだ帯は黒に赤い帯締めのでたちで『なでしこ慕情』の曲に合わせて三人の乙女がみやびにゆったりと舞っていた。おんなごころの切なさを踊り、観てるものの心に踊りはロマンである、踊りは艶である、踊りは色である…、なんていう思いを抱かせる。

まつりが始まった十時には会場は六分の入りだったが、踊りが進むにつれて昼前には満席状態の様子となる。芥川だよりに協力いただいた方が出演されると聞き、お誘いを受けた以上行かねばなるまいと思つた。そして、その様子をつづらなければという思いで出掛けた次第である。

印象に残ったのは、唐崎に伝わる、淀川を京に向かう際の舟唄だろう『夜明け音頭』で♪ヤレ、きよー、

サアヨー、ハイハイ♪の囃しに乗り、浴衣姿の十九人が手を叩きながら廻る踊りで、振り付けもさほど難しそうに見えなかったが、それは熟練した流れるような仕草の成せる技か…。

私の幼い時の記憶にある『福知山音頭』を思い出し懐かしかったのだろうか、心に残った。

その後、こぶしを突き上げる仕草がいかにも大阪を感じさせる大阪元氣音頭、すきやねん大阪、河内音頭、等等と続き、心豊かな気分にならせてもらい会場を後にした。



編集後記

今回八号で、末広がりです。

江戸っ子エンちゃんから健康法を教えてください、人助けになればと思い、雪ノ下を沢山栽培するように手配しました。田舎の田圃で植え付けを叔父がしてくれます。もし必要とされる方があれば、お分けいたします。ご連絡下さい。鉢植えて千円位を予定してます。

裏方さんいらっしやい。

どうも、はじめまして。

この「芥川だより」を創刊以来、誌面作成をワードを使ってお手伝いさせていただいている、芥川商店街の近所に住む「パソコンよろず屋」です。

何から書き始めてよいか随分と迷いましたが、自分の経験から仕事分野であるコンピュータ（パソコン）にまつわるお話を書かせていただきます。

丹波市に生まれ育ち高校卒業後、大阪市内の当時（約二〇年以上前）では数少なかったコンピュータ会社に就職しました。その当時は今の世の中ほどコンピュータが家庭に普及しておらず、マニアの「おもちゃ」や、今からでは想像できないような巨大な電算業務専用機としての活躍が多く、オシャレな現在のパソコンとは、かけ離れた存在でした。

昔からコンピュータ会社で仕事という、常にコンピュータ画面に向かってチャカチャカとキーを打っているイメージが強かったんですが、当時はコンピュータプログラムを鉛筆で紙に書いて起こすのが普通で、忙しい時には小説家なみにペンダコができるほど書きまくりました。それが今や、漢字を忘れてしまうほど字を書かなくなるなんて、えらい時代です。

